をのがれて生存を續けてゆかねばならぬから，各種夫々好適の環境を選んで網を張ることゝなるのである。

ナカムラオニグモの分布線

植村利夫

（東京市瀧野川區西ケ原町310）

北は樺太・千島の寒地より南臺灣・南洋の熱地にまで跨る日本帝國の領土内には，他の動物又は植物の場合と同様，多種多様な蜘蛛の種類が棲息し，其の分布狀態も複雜多岐を極めて居る。私は幸に過去數年間日本各地の蜘蛛を研究する機會に惠まれたのであるが，其の間常にこの豐富な蜘蛛のハウナ中，所謂北方系の寒地性分子と南方系の暖地性分子とが如何なる具合に交錯分布して居るかに就いて，格別の注意を拂つて來た。而して其の結果兩者共其の分布狀態が氣溫に最も深い關係を有して居る事を知るに至つた。本篇では其の中特にナカムラオニグモの分布南限線と氣溫との關係に就いて，所見の概要を記述してみたいと思ふ。

ナカムラオニグモ（*Araneus cornutus*）は國內では樺太・千島・北海道・本州・朝鮮，國外では滿洲・北支那・歐洲及び北米等に分布するもので，何れも北半球の寒帶から暖帶にかけて棲息する事明らかなる種類である。而して本州では紀伊半島の大部分に其の棲息記錄なく，四國・九州等からもまだ正確に採集された事を聞かない。昭和10年に私は上京して，ナカムラオニグモは東京附近に最も普通な蜘蛛の一種である事を知り，この蜘蛛は本州の北半部に多く棲息するものであると思ひこんでゐた所，それから間もなく大阪平野の蜘蛛を調査せられた八木沼健夫氏の報告（1938）に依つて，同平野にも最も普通に本種



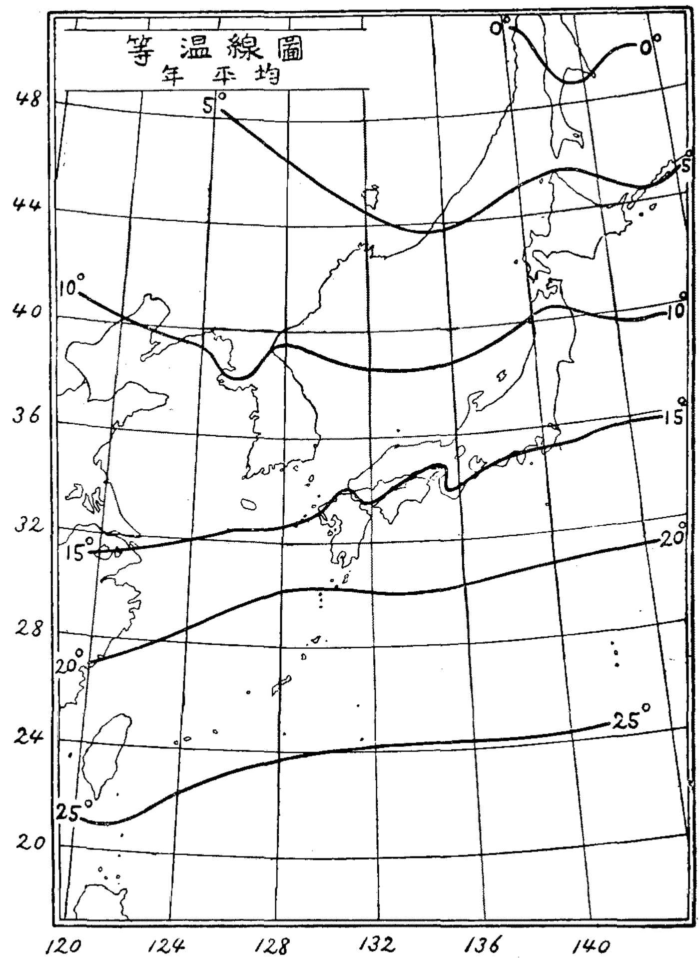
ナカムラオニグモ（原圖）

が棲息する事を知つて驚いたのであつた。私の郷里は紀州の北部を流れる紀之川の北岸にあつて，さして高くもない葛城山脈に依つて大阪府と境してゐるのであるが，只それだけの事で未だにナカムラオニグモが一頭も採集されてゐないのである。其の後私は高島春雄氏採集の伊豆下田及び天城山の蜘蛛を數回にわたつて拜見したのであるが，遂に全回共この蜘蛛が一頭も採集されて來なかつた事を知るに及んで，俄然私は本種の分布南限線に興味を抱くに至つた。伊豆半島の蜘蛛を調べたのはこの時が初めてゞあるが，富士の裾野にこの蜘蛛の多い事は岸田久吉氏の著書（1928）等に依つて早くから承知してゐたからである。

八木沼健夫氏に依れば，大阪平野に於けるナカムラオニグモの既知分布南限は濱寺町附近であり，今又富士山麓に多いこの蜘蛛が伊豆半島に産しない事を知つた私は，上記本種の分布地を等溫線に依つて調べてみたが，兩地方共大體年平均氣溫 15°C 線（又は一月 5°C の等溫線）に沿つてゐる事を知つたのである。爾來私はこの兩線に沿つた地方の蜘蛛分布に多大の關心を持つてゐたのであるが，其の後發表せられた八木沼氏の「中國地方の蜘蛛相概要」（1938）及び直接私が拜見した樋賀安平氏の「伊勢神宮々域の蜘蛛」（1938）にもナカムラオニグモが全然姿を見せなかつた。後者は年平均 15°C 線より以南に位置してゐるので，寧ろ此の蜘蛛の姿が見えない方が私にとつて望ましい事であつた

が，中國地方から一頭も採集されなかつた事に對しては聊か淋しい思ひをしてゐたのである。何となれば私は前記 15°C 線を以て密かにナカムラオニグモの分布南限線と豫測を下してゐたからである。私は中國地方然も瀬戸内海沿岸にも必ずこの蜘蛛が棲息するであらうと信じてゐたのである。所がそれから間もなく，當時廣島縣忠海中學校に奉職中の横川孫左衛門氏より送られた同地方の標本を拜見中，偶然にも立派なナカムラオニグモが2頭入つてゐるのを知つて，私は思はず膝を敲いたのであつた。こゝに於て私はナカムラオニグモが年平均氣溫 15°C の等溫線まで分布するらしいといふ私の豫測に對して，一つの信念を得たやうな氣がした。そこで再び三重縣の北部に此の蜘蛛が分布するか否かに就いて最大の興味を持つに至つたのであるが，これ又最近になつて槌賀安平氏採集の標本に依つて，同縣津市（昨夏三重師範農園にて採集）にも本種が棲息する事を知るに至つたのである。紀州と大阪府は府縣を分ち，又低いとは云へ山脈を距てゝゐるのであるが，三重縣の津市と宇治山田市とは全く同一の縣内にあり，然も地勢上から見て動物の分布を遮るやうなものは何一つとして無いにも拘らず，前地はナカムラオニグモを產し，後地は之を產しないと云ふ事は大いに注目に値すると思ふのである。

年平均氣溫 15°C 線に沿つた奈良縣・愛知縣・靜岡縣西部の調査はまだ十分に行はれてゐないが，神奈川縣には此の蜘蛛が普通に產するやうであるし，千葉縣九十九里濱でも松本理三郎氏は多數採集して居られる。然るにこの線より稍南に偏した伊豆大島・三宅島・紀伊半島南部・淡路島・四國・九州等に本種が棲息してゐない事は 岸田（1931）・仲辻（1936）・松下（1939）・植村（1938, 1939）・高橋（1939）諸氏等の報告に依つても明らかである。又この線より以北の東京府・山梨縣・長野縣・北陸地方から奥羽にかけては實に豐富に產する事は，これ又諸多の論文に依つて明示されてゐる。只惜しむらくはまだ山陰地方から正確な採集記錄が發表されてゐないし，藤田氏の「福井縣產蜘蛛目錄」にも本種の名が登載されてゐない。然し廣島縣の忠海町附近に確かに



本種の分布する事を知り得たのは，私の所論に對する何よりの力強い證據となるわけである。

以上の様な理由で，私はこゝに前記年平均 15°C の等温線を以てナカムラオニグモの分布南限線と假定し，これにナカムラオニグモ線と命名しておく事に

する。勿論前記のやうに尚調査不十分な地方は多々あるし，叉動物の分布は幾多の環境に支配される外，他物に附着して偶然に移動する事もあり得るし，特に蜘蛛の場合は絲に乗つて飛行するといふやうな特別な移動も行はれ得るわけであるから，今後この線に對して多少の例外は續出する事と思はれるが，先づ大體の見當は外れないであらうと思つてゐる。現に高島春雄氏に依つてあれだけ調査せられた伊豆下田に，其の間一頭も採集せられなかつたナカムラオニグモが，突然昨年8月辻忠二郎氏に依つて發見せられてゐる。これは明らかに例外の筆頭となるものであるが，前記の様な經過から察して，私は先づ下田では普通の狀態にナカムラオニグモを產しないと解釋する方がよいのではないかと思ふ。この蜘蛛の普通の產地と云へばどんな呑氣眼鏡にでも必ず入るだけ多數に棲息してゐるからである。もしもこの様な棲息地が紀州・四國・九州等から發見されたならば，勿論このナカムラオニグモ線の生命は消失するわけである。

上記のやうな次第で私はこゝにナカムラオニグモ線なるものを創設したのであるが，私の今までの淺薄な硏究を以てすれば，これは獨りナカムラオニグモの分布南限線であるばかりでなく，本州にまで分布する他の北方系の蜘蛛も大體この線を以て南限とするやうに思はれるのである。此の方の詳細は號を改めて記述する算りである。

私はこのナカムラオニグモ線を一人で假設して更に推考を重ねてゐた頃（昭和13年），植物の方で小清水卓二氏が日本に於けるハマオモト（*Crinum*）の分布北限線が上記の 15°C 叉は年最低氣溫 −3.5°C の線に一致する事を認め 就中 −3.5°C の線の方がより適切であるとの理由で，これにハマオモト線（Crinum Line）と命名して發表* してゐられた事を最近になつて知つた。動物と植物との差こそあれ，北方系のナカムラオニグモと南方系のハマオモトとが，殆ど同一の線に依つて相接してゐる事は，興味ある現象として大いにわが意を强うし

* T. Koshimizu : On the "Criuum Line" in the Flora of Japan. The Botanical Magazine Vol. LII, No. 615 (1938)

た次第である。

最後に文獻の拜借を賜つた浪速博物學會の八木沼健夫氏に謹しんで感謝の意を表する。(昭和15年5月12日稿)

モズの早贄になつた蜘蛛に就いて

加　藤　正　世

(東京市板橋區　石神井公園)

モズと云ふ小禽は秋から春にかけて里に現はれ，色々な小動物を木の枝等に刺して行くことはよく知られて居る習性であつて，昔から早贄或は草莖の名で親しまれて居るものである。この事に就いては籾山德太郎氏が昨年12月號の昆蟲界に67頁に亘る論文を發表されて居るから是非參考とせられ度い。

筆者は石神井風致地區を中心として產する有ゆる物(生物以外の資料も含む)を極力集めて調査中であるが，早贄もその一部にしてある。その樣な關係で出來る限り發見に努力して居るが，蜘蛛の犧牲者は今年初めて發見することが出來たので，早贄としては未記錄でもあるので，記錄を兼ねて紹介することゝした。Data は寫眞のラベルに見られる通りであるから略して置く。蜘蛛は成熟したスズキドクグモ *Lycosa* sp. ¶ の♀で，背甲の左側に小枝が刺つて居る。第2步脚は脫落したか或はモズの胃の腑に納まつたかして附いて居ない。發見當時は腹部の狀態から見て犧牲になつてから2日目位らしく，未だ生々して居るので，早速腹部を切り離して乾燥標本の方法を講じて此處に示した樣な標本に製作した。從つて完全な早贄標本に出來て居る。

¶ *Lycosa suzukii* Kishida として知られて居るが原記載が發表されて居ないので sp. として置く。